

壁紙が美しいBing Desktopで最新情報にすぐアクセス [PR]

地方

川柳を書く 0

ツイート 17

いいね! 0



# 帰ることができぬ現実 福島県大熊町 一時帰宅に同行 茨城

2013.4.17 02:07

東日本大震災による福島第1原発事故の影響で、全町民が避難した福島県大熊町。町の95%が帰還困難区域とされ、茨城県にも331人（4月10日現在）が避難している。先月下旬、大熊町に家を持ち、現在は水戸市に住む50代の男性の一時帰宅に同行した。目にしたのは想像を絶するほどに荒れた家屋、帰ることができない人たちの現実だった。（今仲信博）



## ◆第1原発から数キロ

原発から数キロ離れた場所に位置する男性宅。スクリーニング場で防護服などを受け取った後、さらに車で約20分。途中、商品が倒れたままの商店や、雑草が伸び放題となった田んぼが目飛び込んでくる。

男性宅の庭や周辺の道路には、震災で落ちて割れた瓦が散乱していた。家の中は腐った畳からキノコが生え、瓦が落ちた屋根は修復できず、2階は雨の影響で天井が抜け落ち、カビで青く染まった天井板が床に積み重なっていた。

一時帰宅の際、家の中の放射線量を必ず量るという男性。「いつか何かの役に立つだろう」と、この日もすべての部屋を測定した。

## ◆終の棲家のはずが

### ◆終の棲家のはずが

男性は茨城県出身。仕事で福島県に移り、大熊町に家を持った。その後、茨城に転勤となったが、定年後は大熊町に戻る計画を立てていた。この家が「終(つい)の棲家(すみか)」のはずだった。だが、震災で事態は急変した。

平成23年8月から、今回で7回目となる一時帰宅。目の当たりにするのは、どんどん損傷が激しくなる家の状態だ。訪れた日は枯れていた庭の草も、夏場は身の丈ほどの高さになるという。「梅雨になったら人が入るのも厳しくなる。駄目だよ。これはもう、住めないね」。男性はあきらめ顔でつぶやき、「終の棲家は、またこれから決める」と、家をあとにした。

帰路、津波被害に遭った浪江町を回った。がれきの山、流された車や民家。大熊町同様に、あの日から時が止まったかのような状態...。「復興と呼べる日が来るのだろうか」。そんな思いが頭をよぎった。

### ◆「誰も壊したくない」

大熊町から水戸市に避難している別の50代男性は「自分の家には思い入れもあるから、誰も壊したくはない」と語りながら、「ただ、10年先に町に住めるといっても、その先の保障はない」と肩を落とす。

進まぬ復興、思うようにならぬ現実。それでも避難者は力強く前を向く。この男性は「“避難者”と呼ぶのは、そろそろやめるべきだ」と指摘する。「お世話になる段階は過ぎた。自分で生活を確立していく中で、状況をどう改善するか。今はその段階だ」-